

Lancelot Andrewes とジェームズ一世

— The Gowrie Conspiracy 説教と The Gunpowder Plot 説教を中心にして —

高 橋 正 平

序

ジェームズ一世は生前二度にわたって生命の危機に遭遇した。その一つは、ジェームズ一世がスコットランド王のジェームズ六世であった1600年8月5日に起こった事件である。ジェームズ六世はスコットランド、パースにあるガウリー伯兄弟所有の城に幽閉されかかり、危機一髪で難を逃れたのである。ジェームズ六世は狩猟中に第三代ガウリー伯 John Ruthven の弟 Alexander Ruthven に会い、Ruthven 家所有のガウリー・ハウス城に招待され、そこで軟禁されかけたのである。ジェームズ六世は家臣達に事件を知らせたので、家臣がガウリー伯兄弟を殺害し、王は救出された。この幽閉事件の真相は明らかでなく、ガウリー伯兄弟の父が1582年のジェームズ六世誘拐事件の首謀者の一人で、王は伯に多額の負債を抱えていた。そのため幽閉事件は王自らが仕組んだ自作自演劇ではないかとの疑いをかけられ、真相は闇のなかである。しかし、ジェームズ一世はこの危機からの脱出を「裏切りの二人の悪党への神の正しい行動の顕著な例」と見なし、「その悪党どもは王への残虐かつ血なまぐさい反逆を企んだ」⁽¹⁾と厳しく批判し、8月5日を記念日とし、事件を弾劾する説教を行うよう命じた。その説教を命じられたのが、ジェームズ一世のお気に入りのAndrewesであった。彼は合計9編のガウリー兄弟幽閉事件記念を説教を王の前で行うことになった。9編の説教のなかでも1607年に行われた最初の説教は特に我々の注意を引く。その説教が幽閉事件非難の最初の説教であるのみならず、それが以後のAndrewesの説教の原型ともなっており、いかにしてAndrewesが事件を非難し、王を擁護しているかが明白に読みとれる説教となっているからである。

Andrewes は前年1606年にもジェームズ一世を擁護する説教を行っている。そ

れは1605年11月5日、カトリック教徒の一部過激派ジェズイトによる国会議事堂爆破事件を非難する説教である。1600年8月5日のスコットランドでの幽閉未遂事件6年後にジェームズ一世は再度生命を狙われた火薬陰謀事件に遭遇したのである。ジェームズ一世はこの事件を機に国内のカトリック教徒に「忠誠の誓い」を課し、国内のカトリック教徒を「王に忠実なカトリック教徒」と「反抗的なカトリック教徒」に分類しようとした。⁽²⁾ この「忠誠の誓い」論争は英国のみならず、ヨーロッパの国々をも巻き込む「書物戦争」を引き起こすことになった。ジェームズ一世は、国内では火薬陰謀事件をきっかけとして「忠誠の誓い」をカトリック教徒に課す一方で、説教家には火薬陰謀事件記念説教を行わせた。それは事件の風化を防ぎ、併せて事件の残虐性、非合法性を説教という「マスメディア」を通して国民に強く訴える作戦でもあった。火薬陰謀事件は国会会期中の王を始めとし、王妃、息子や国の要職にある者達の殺害を国会議事堂爆破もろとも企てた前代未聞の事件で、それはガウリー伯兄弟による幽閉未遂事件よりもはるかにジェームズ一世を驚愕せしめ、ジェームズ一世が最も恐れていた英国社会を根底から覆す大事件であった。ジェームズ一世はそのような事件を一般人に広く知らしめ、過激なカトリック教徒の危険な存在を国民に周知させるために説教家を積極的に利用した。当時説教家は世論の代弁者で、現在で言うならば報道関係者のような立場を占めていた。⁽³⁾ マスコミが現代ほど発達していなかった17世紀初頭においては説教家の果たす役割は大きくかつ一般人への情報源としての影響力は計り知れなかった。ジェームズ一世がそのような説教家を利用しないわけではない。彼はガウリー伯兄弟未遂事件記念説教同様、火薬陰謀事件記念説教を毎年事件のあった11月5日に名のある説教家に行わせ、事件の重大性を国民に知らしめることにした。ジェームズ一世の面前で最初に火薬陰謀事件説教を行った説教家はLancelot Andrewesであった。⁽⁴⁾ 彼は、Whitehallでジェームズ一世臨席の下はほぼ毎年1606年から1618年まで合計10編の火薬陰謀事件記念説教を行った。なぜAndrewesがこれほどまで多くの説教をジェームズ一世の命令によって行うことになったのか。その理由を明らかにするのが本論の目的である。それは以下の2点を論ずることにより解明される。一点目は、ジェームズ一世の火薬陰謀弾劾説教とAndrewesの火薬陰謀事件記念説教の比較である。ジェームズ一世は、国会爆破計画が発覚した4日後の1606年11月5日に国会で火薬陰謀事件を批判する演説を行ってい

る。そのジェームズ一世の国会演説の Andrewes の説教への影響を考察するのが第一の点である。二点目は、火薬陰謀事件記念説教とガウリー伯兄弟未遂事件記念説教との比較である。二つの説教ともジェームズ一世の擁護と王の生命を狙った者達への激しい非難・憎悪がその根幹を成している。ジェームズ一世期における説教の大きな特徴の一つは、説教家が聖書の一部を時代に「適応」することである。この聖書の「適応」が Andrewes の二つの説教に共通したレトリックであることを論じたい。本論ではこれらの点から Andrewes のガウリー伯兄弟によるジェームズ一世（事件当時はジェームズ六世）幽閉事件記念説教と火薬陰謀記念説教への考察を通して、Andrewes がいかにしてジェームズ一世を擁護しているかを論じ、ジェームズ一世擁護の真意はどこにあったのかをも論じていくことにする。

1. ジェームズ一世の国会演説

— *Misericordia Dei supra omnia opera eius* —

ジェームズ一世は火薬陰謀未遂事件の4日後、1605年11月9日、国会で演説を行い、事件への自らの見解を表明した。そのなかでジェームズ一世は事件の概要に触れ、王自らが事件発覚を未然に防いだと述べるとともに、事件批判のみならず王観、カトリック教徒への王自らの考えを明確にし、以後の火薬陰謀記念説教を考慮に入れると興味深い演説となっている。火薬陰謀事件直後の演説であるだけにジェームズ一世の事件からの無傷の脱出への思いは鮮明で、王は、演説のなかで特に「神の慈悲」のおかげで事件は未遂に終わったと神への感謝の念を特に強調する。この「神の慈悲による危機からの救出」はジェームズ一世国会演説の基調である。ジェームズ一世は演説の目的について以下のように述べる。

So now my Subject is to speake of a farre greater Thanksgiuing then before I gaue to you, being to a farre greater person, which is to God, for the great and miraculous Deliuery he hath at this time granted to me, and to you all, and consequently to the whole body of this Estate.⁽⁵⁾

火薬陰謀事件発覚直前に事件の全容が明らかになり、ジェームズ一世を始めとする要人は生命を救われた。そのためにジェームズ一世は神への感謝の念を表し、毎年11月5日に火薬陰謀記念説教を行うようにジェームズ一世は示唆する。ジェームズ一世は、神の慈悲による陰謀事件からの救出に際して神への感謝をまず第一に挙げる。ジェームズ一世は、旧約聖書のノアを例に挙げ神は「水」によって世界を破壊したが、新訳聖書の「ヨハネの黙示録」では神は「火」によって全世界を罰しようとしている。ノアの場合と同様神への敬虔な信仰を失わない者は破壊されず、浄化されるだけである。ジェームズ一世はスコットランド王であったときにも同様に生命の危機にさらされた Gowrie 兄弟による軟禁事件を体験したが、王はその難を逃れたことがあった。ジェームズ一世は二度にわたる陰謀事件による生命の危機を脱したわけであるが、なぜ彼は危機を脱したか。それはジェームズ一世の神への深い信仰心によるのである。ジェームズ一世はノア同様信心深い人間で、神はそれ故に王を生命の危機から救ってくれたのである。ジェームズ一世はこのように神への絶対的な信仰心を国会演説で強調し、王殺害を狙ったカトリック教徒を批判する。そしてジェームズ一世は、王は地上における神の代理人であるという王権神授説にも触れる。神の代理人たる王を殺害することは神への反逆にも等しい許し難い行為である。ジェームズ一世の王権神授説を前面に打ち出し、神の現世における代理人たる王への反逆を強い口調で非難する。ジェームズ一世は火薬陰謀事件に対する神の慈悲を前面に出し、神の慈悲によってこの事件は未然に防がれたことをまず第一に強調する。次にジェームズ一世が述べるのは事件の残酷性である。

First, in the crueltie of the Plot it selfe, wherein cannot be enough admired the horrible and fearefull crueltie of their device, which was not onely for the destruction of my Person, nor of my Wife and posteritie onely, but of the whole body of the State in generall; wherein should neither haue bene spared, or distinction made of yong nor of old, of great nor of small, of man nor of woman: The whole Nobilitie, the whole reuerend Clergie, Bishops, and most part of the good Preachers, the most part of the Knights and Gentry; ...⁽⁶⁾

この一節は火薬陰謀事件の残極性について触れるのみならず、国会の参列者

をもあげている。国会議事堂爆破計画は王、女王、子息、国家の要職にある者、老若男女、貴族、聖職者、主教、説教家、ナイト及びジェントリー、これらすべてを爆破するものであった。言うなればジェームズ一世王朝の中樞が一瞬のうちに殺害されるという大事件であった。ジェームズ一世は殺害方法には人間、動物、それに「水」と「火」があるが、そのなかでも「火」による殺害は最も凶暴かつ残酷であると言ひ、火薬陰謀事件の残虐性を非難する。

次にジェームズ一世が論ずるのは事件の動機である。なぜカトリック教徒は王の殺害を狙ひ、国会の爆破を計画したのか。ジェームズ一世からすれば事件の動機は、「ささいな理由と言えない理由」である。⁽⁷⁾ 首謀者が王のために破産したり不満を抱いている者であればこの事件は復讐である。しかしジェームズ一世は彼らをそのような事態に至らせたことはない。それは、“meerly and only Religion”⁽⁸⁾ が引き起こした事件であった。Guy Fawkesによればカトリック教に対する“cruell Lawes”のためであった。英国内におけるカトリック教徒への弾圧・抑圧が彼らをして王殺害という暴挙に走らせたのである。しかし、ジェームズ一世からすればすべてのカトリック教徒を弾圧したわけではない。彼は国内の平和・秩序維持のために一部反体制的な過激なカトリック教徒を取り締まっただけで、王に対して忠実なカトリック教徒まで弾圧したことはなかった。ジェームズ一世は火薬陰謀事件の原因となるようなことは何もしておらず、忠実なカトリック教徒に対しては寛容な態度をもって接していた。ジェームズ一世がカトリック教徒を厳しく取り締まったとしたらそれは彼らが国内の秩序を乱すために他ならなかった。国内の秩序維持のためにジェームズ一世が取った処置の一つが「忠誠の誓い」であったことは言うまでもない。ジェームズ一世王朝維持のためには国状安定は不可欠である。ところが一部過激なカトリック教徒が国内を混乱に陥れようとしている。その第一歩が火薬陰謀事件であった。

第三にジェームズ一世は火薬陰謀事件発覚の経緯について述べる。ジェームズ一世は事件について忠告する書簡を受けとり、即座にその真意を読みとったのである。

...when the Letter was shewed to me by my Secretary, wherein a generall obscure aduertisement was giuen of some dangerous blow at this time, I did vpon the instant interpret and apprehend some darke phrases therein, contrary to the ordinary Grammer

construction of them,...to be meant by this horrible forme of blowing vs all by Powder; And thereupon ordered that search to be made, whereby the matter was discouered, and the man apprehended: ⁽⁹⁾

これは事件の首謀者の一人の Francis Tresham が、親戚の Monteagle 卿に国会議事堂爆破陰謀の全容を知らせるメモを送り、それを Monteagle は Salisbury 伯爵に見せ、伯爵はその意味を読みとったが、メモの解説をジェームズ一世に任せるために王にそのメモを見せたのである。意味のはっきりしない文面を即座に理解し、事件の真相を突き止めたのはジェームズ一世であった。火薬陰謀事件を未然に防ぎ、ジェームズ一世王朝を破壊から守ったのは他ならぬジェームズ一世自身であった。このようにジェームズ一世は火薬陰謀事件についてその残虐性、動機、及び事件の発覚者としての自らについて述べ、神の慈悲を訴える。信心深い王に対して神は事件直前に慈悲を示し、王の生命を危機から救ったのである。ジェームズ一世は“this his [God’s] mercifull Deliuery”, “Thanksgiuing to God for his great Mercy”, “deuine worke of his Mercy”⁽¹⁰⁾ といった表現を幾度も使用し、事件発覚の背後には神の慈悲があったことを強調する。そして *Misericordia Dei supra omnia opera eius*, 即ち、「神の慈悲は神のすべての御業を超える」と神の慈悲を讃えるのである。ジェームズ一世が国会演説で何よりも強調したかったのは当然のことながら火薬陰謀事件からの奇跡的な脱出であり、それに対する神への感謝である。

次にジェームズ一世は火薬陰謀事件を後世長く国民の記憶に残るように毎年陰謀事件があった11月5日に記念説教が行われることを提案する。ジェームズ一世は次のように言う。

It resteth now that I should shortly informe you what is to bee hereafter vpon the occasion of this horrble and strange accident. As for your part that are my faithfull and louing Subiects of all degrees, I know that your hearts are so burnt vp with zeale in this errant, and your tongues so ready to vtter your duetifull affections, and your hands and feete so bent to concurre in the execution thereof, (for which as I neede not to spurre you, so can I not but praise you for the same:)⁽¹¹⁾

王の臣民が火薬陰謀事件を非難する熱意に燃え、王に対する柔順な愛情を示すことをジェームズ一世は期待している。王への柔順な愛情とは火薬陰謀事件を非難し、王を擁護することである。王の期待通り、以後毎年11月5日に火薬陰謀記念説教が行われることになる。過激なカトリック教徒の蛮行を国民に知らしめ、事件が人々の記憶から消えることを極度に恐れたジェームズ一世が採った策であった。これはまた、ジェームズ一世の過激なカトリック教徒への対処が誤っていないことを示すことに他ならない。ジェームズ一世は国会演説で、このように火薬陰謀事件の究明と事件を未然に防いでくれた神の慈悲への感謝、事件の風化防止、カトリック教徒の実体を国民に周知すべく毎年事件発覚日に火薬陰謀記念説教の励行と同時に、事件の真相究明と事件関係者への厳重な処罰にも言及している。ジェームズ一世は演説の中で国会の目的として「神の栄光と王と国民の確立及び富の促進」を挙げ、ジェームズ一世は国益に資することに命じられていると述べ、自らのカトリック教徒への政策に誤りはないことを強調する。そして聴衆に国内の潜在的な悪事の発見及び反逆者の横柄な行為鎮圧に励行するよう訴える。ジェームズ一世を迫害するのは同じ悪魔であり、彼を救助するのは同じ神である。そして、王の繁栄と隆盛が国家の繁栄と一致するとも言う。王の繁栄なくして国家の繁栄はありえない。国民の悪への意思統一と悪の除去を聴衆に強く訴えるジェームズ一世の演説にはスコットランドから英国に来てわずか3年後に火薬陰謀事件に遭遇したジェームズ一世の強い決意が感じられるのである。

2. Lancelot Andrewes の The Gunpowder Plot 記念説教

Lancelot Andrewes (1555-1626) は、エリザベス女王からも重用されていたがジェームズ一世により主教から説教家更には宮廷へと出世の階段を登り続け、宮廷での祝祭日における説教では Andrewes の右に出る者はいないほど祝祭日説教を専ら一人占めしていた。⁽¹²⁾それほどジェームズ一世の愛顧を受け、重用された Andrewes は当然のことながら火薬陰謀記念説教もジェームズ一世の臨席の下面行うことになる。ジェームズ一世はスコットランドでも Gowrie 兄弟による軟禁事件に巻き込まれたことがあり、それを記念した Gowrie 陰謀説教は9編、Gunpowder Plot 説教は10編である。これは Andrewes がいかにジェームズ一

世の信望を一身に集めていたかの証左でもあろう。我々はジェームズ一世と Andrewes との関係から Andrewes の説教の内容はある程度は察しがつく。つまりその説教は徹底したジェームズ一世擁護の説教であるということである。確かにジェームズ一世時代の説教家がジェームズ一世の政策に干渉することは極めて危険であった。ジェームズ一世に登用される気があるならば、説教家は自説を曲げてまでも王を支持しなくてはならなかった。Andrewes は自分が置かれている立場を十分に知っていた。その Andrewes が事件から1年後の1606年11月5日に最初の火薬陰謀記念説教を行うことになった。

1605年11月5日の火薬陰謀未遂事件から4日後の国会演説で、ジェームズ一世は重要な点に触れている。第一点は、王が以後の火薬陰謀記念説教が何を扱うべきかについて明確な指針を与えていることで、それは未遂事件からの奇跡的な救出に対しての神の慈悲への感謝である。第二点は、火薬陰謀事件の残酷性、動機、事件の発覚者としてのジェームズ一世である。王の国会演説後から多くの説教家が火薬陰謀記念説教を王の面前で行い、王の期待に応えようとした。Whitehallでの最初の公式説教は Andrewes によって1606年11月5日にジェームズ一世臨席の下で行われたが⁽¹³⁾、その説教はジェームズ一世の国会演説に沿うような形で行われている。

(1) “Deliverance from the Gunpowder Plot”

Andrewes は、ジェームズ一世臨席の下宮廷付き説教家として1606年11月5日に Whitehall で火薬陰謀記念説教を行うことになる。説教は聖書の一部を掲げ、それに対する解釈を行うことをその第一の目的とする。そして最も重要なことはその聖書の一部を懸案の問題に「適応」し、問題の解決にあたらうとする。Andrewes が選んだ聖書は旧約聖書「詩編」118章23-24節であった。その全文は以下の通りである。

This is the Lord's doing, and it is marvellous in our eyes. This is the day which the Lord hath made; let us rejoice and be glad in it.

(これは主のなされた事で、われらの目には驚くべき事である。これは主が設けられた日であって、われらはこの日に喜び楽しむであろう。)

Andrewesが「詩編」の一節を説教の主題に選んだ理由は二つ考えられる。その一つは「詩編」がジェームズ一世が特に好んだ聖書であったことである。ジェームズ一世は「詩編」の英訳を試みたこともあり、「詩編」は聖書のなかの愛読書の一つであった。もう一つは、「詩編」にはユダヤ人が遭遇した国家・王国の存亡に関わる様々な事件が記述され、その事件からのユダヤ人の救助が主への感謝と共にうたわれていることである。ユダヤ人の神への絶対的な信仰を基に主への感謝と祈りが「詩編」全編にあふれ、それがAndrewesが説教の主題に「詩編」の一部を選んだ理由であったと思われる。つまりAndrewesは火薬陰謀記事件と酷似した聖書の一部を「詩編」に探し求めたのである。それにもう一つ付け加えるならば「詩編」の作者がダビデと思われていたこともAndrewesが「詩編」を選んだ理由であったろう。ジェームズ一世は自らをダビデ王やソロモン王にたとえられるのを好み、多くの説教家がジェームズ一世をダビデ王やソロモン王にたとえていたからである。詩編118章23-24節は、主への感謝をうたっているが、118章は、「わたしが悩みのなかから主を呼びと、主は答えてわたしを広い所に置かれた。」(5節)とか「わたしはひどく押されて倒れようとしたが、主はわたしを助けられた。」(13節)とか「主はいたくわたしを懲らされたが、死にはわたされなかった。」(18節)からも明らかなように敵の陰謀からの救助と死に至る懲罰からの救助を扱い、その主の救助への感謝が「主に感謝せよ、主は恵みふかく、そのいつくしみはとこしえに絶えることがない」(1)となっている。これが火薬陰謀事件と符号する点が多いことは明らかである。つまり、「詩編」118章23-24節も火薬陰謀事件も神の慈悲による生命の危機からの救助と言う点で一致しているのである。Andrewesは、「詩編」の一節が火薬陰謀記念日にふさわしい説教であることを説教の冒頭で明言しているが、以下「詩編」と火薬陰謀事件との関連性を論じていく。Andrewesは11月5日が神によって作られた日で、その日に行われたことは「主のなされた事」とあると言う。11月5日は神が英国民を救い、榮えさせ、祝福した日である。

If ever saved, prospered, blessed any, this day He saved, prospered, and as we say, fairly blessed us.⁽¹⁴⁾

神の慈悲がなければ11月5日はジェームズ一世が爆破される日であった。と

ころが、それは神により未然に防がれ、神の祝福を受けることになったのである。このようにAndrewesは主の御業によりジェームズ一世が救助されたことを強調する。次にAndrewesはジェームズ一世が11月5日を記念日としたことをふまえ、なぜ11月5日を記念日としたかについて述べる。

Of keeping in remembrance, many ways there be: among the rest this is one, of making days, set solemn days, to preserve memorable acts, that they be not eaten out by them, but ever revived with the return of the year, and kept still fresh in continual memory.⁽¹⁵⁾

これはジェームズ一世が国会演説で言ったことをふまえての言葉であることは明らかである。ジェームズ一世は火薬陰謀事件の風化を防ぎ、後世に陰謀事件を伝えるべく11月5日を記念日とする旨の発言をしていたが、Andrewesはそのジェームズ一世の言葉に沿って以上のような発言をしているのである。聖書にはたとえば過ぎ越しの祭りとかプリム祭のようにユダヤ人が危機に接した事件があり、ユダヤ人が無事にその危機を逃れた記念にそれらを記念日としている。同じように英国国民も火薬陰謀事件の難を逃れた記念に11月5日を記念日とするのである。Andrewesは英国国民がユダヤ人と「同じ道」を歩んでいることを示唆する。ジェームズ一世の受難はユダヤ人の受難と軌を一にしているのである。Andrewesが「詩編」を説教に選んだ理由はこのようにユダヤ人と英国国民は同じ危機に遭遇し、しかも神の慈悲により救助されたからに他ならない。Andrewesは、「詩編」の「わたし」をダビデと解釈しているが、この解釈には諸説があり、「わたし」がダビデか否かは定かではない。Andrewesは「わたし」をダビデと解釈することにより、ジェームズ一世をダビデ王と同じ危機に遭遇したと見なし、両者の類似を強調する。Andrewesは、ダビデとジェームズ一世の類似を説教で徹底して論ずる。ダビデもジェームズ一世も危機からの救助を体験する。ダビデの苦難についてAndrewesは次のように言う。

He[David] was in a great distress. Three several times, with great passion he repeats it, that his enemies 1. “came about” him; 2. “compassed” him round; 3. “compassed” and “kept” him “in on every side;” were, no swarm of “bees” so thick; that they gave

a terrible lift or thrust at him, to overthrow him; and very near it they were. And at last, as if he were newly crept out of his grave, out of the very jaws of death and despair, he breaks forth and saith, I was very near my death; near it I was, but *non moriar*, “die I will not” now, for this time, but live a little longer to “declare the works of the Lord.” This was his danger; and a shrewd one it seemeth it was. From this danger he was delivered. This, the *factum est*.⁽¹⁶⁾

敵の包囲により死に直面したダビデを主が救ってくれたことに対してダビデは「死ぬことなく、生きながらえて主の御業を語り伝え」ることを決意する。「詩編」118章には「救助がなされたこと」「神によってなされたこと」「すばらしい救助」「我々の目からしてもすばらしい救助」が記されており、これらはジェームズ一世の火薬陰謀事件にそのまま適応されるのである。

では、火薬陰謀事件はどうか。「詩編」との関係から Andrewes は、火薬陰謀事件へ論点を移す。Andrewes は、火薬陰謀事件はダビデが経験した苦難よりはるかに大きい事件であったという。両者の比較は以下ようになる。

- (1) ダビデは危機を事前に知っていた。ジェームズ一世は危機を知らなかった。
- (2) ダビデの包囲は地上での包囲であった。ジェームズ一世の場合は地下であった。
- (3) 包囲の場合は脱出できる可能性があるが、爆破の場合は脱出できる可能性はない。
- (4) ダビデは「はち」のように包囲されたが、火薬陰謀は「毒蛇」の群れによって計画された。
- (5) ダビデの危険は本人自身に関わるだけだったが、火薬陰謀はジェームズ一世のみならず王妃、王子等多くの者が関わっていた。
- (6) ダビデの危機は人間からであったが、ジェームズ一世の危機は単に人間からのみならず悪魔の成せる陰謀であった。⁽¹⁷⁾

Andrewes は、ジェームズ一世の国会演説で王が事件の残虐性を強調していたことを知っており、最後の(6)で事件の残虐性に更に言及する。Andrewes によれば、過去の歴史にも火薬陰謀事件に匹敵する事件はなく、事件は“inhuman”、

“brutish”以上である。聖書にも火薬陰謀事件に匹敵する事件はない。そもそも火薬陰謀事件は聖書に反する残虐な行為である。なぜならば聖書には「正しい者と悪い者とを一緒に殺すこと」（創世記：18章25節）を神は禁じており、「母鳥を雛と一緒に取ってはならない」（申命記：22章6節）、「わが油そそがれた者たちにさわってはならない」（詩編：105章15節）、と記されており、火薬陰謀事件はこれらの聖書の言葉を真っ向から否定する行為である。⁽¹⁸⁾ Andrewes は、火薬陰謀事件がいかに聖書に反する行為であるかを以下のように言う。

But here [in the Gunpowder Plot] is Satan flat contrary, in despite of Law, Prophets, Psalm, Epistle and Gospel; *Hoc est Christum cum Paulo conculcare*, to throw down Abraham, and Moses, and David, and Paul, and Christ, and God and all, and trample upon them all.⁽¹⁹⁾

Andrewes からすれば火薬陰謀事件は旧約・新約のいずれの聖書にもにその例が見られず、また聖書の人物をも踏みじめる行為である。陰謀者はまさしく悪魔以外の何者でもない。神から油注がれた者を殺害するとはまさに神への反逆行為そのものであり、決して看過できない不遜行為である。しかしながらこの“abomination of desolation”たる事件は国会という「聖なる場所」で計画され、しかも事件の張本人ジェズイットは事件を合法的として正当化し、賞賛に値するとして是認していた。聖書でも禁じられている王殺害が同じく神の道を歩むジェズイットによって計画され、実行に移されようとしていた事実 Andrewes は驚愕の念を禁じ得ない。火薬陰謀事件は、「人間ではなく悪魔が計画を考え出し、人間ではなく神がその計画を挫折させた」のである。⁽²⁰⁾ 悪魔の残虐な行為は神の慈悲により未然に防がれ、王は爆破の危機を逃れた。火薬陰謀事件からの奇跡的な脱出について Andrewes は以下のように言う。

The mine is discovered, the snare is broken, and we are delivered. All these, the King, Queen, Prince, Nobles, Bishops, Judges, both houses, alive all; not a hair of their heads perished, not so much as “the smell of fire” on any their garments.⁽²¹⁾

そしてこの後、「詩編」のダビデの神への感謝の言葉が引用される。

Give thanks, O Israel, unto the Lord thy God in the congregation from the bottom of the heart. Here is little Benjamin thy Ruler, the Prince of Judah.⁽²²⁾

ここでダビデはジェームズ一世、イスラエルは英国、と同一視されている。「詩編」の内容が17世纪初頭の英国のジェームズ一世期に適応されるのである。火薬陰謀事件からのジェームズ一世の奇跡的な脱出はちょうど建国の歴史を歩んでいたイスラエルが様々な苦難を逃れたことと同様、すべて神の成せる業であった。Andrewesは、ジェームズ一世同様事件からの神の慈悲による爆破直前の脱出を強調し、神への感謝の念を表す。火薬陰謀事件の残虐性及び奇跡的な脱出をイスラエルの歴史と重ね合わせ、聖書特に詩編の記述と同じ苦難をジェームズ一世は体験していることを強調する。ダビデ王再来と考えられていたジェームズ一世にとってAndrewesの詩編からの火薬陰謀事件非難は大いにジェームズ一世を喜ばせたに違はなく、御用説教家としてAndrewesは十分にその義務を果たしていた。

(2) 火薬陰謀事件発覚者としてのジェームズ一世

国会演説でジェームズ一世は、自ら火薬陰謀事件のメモを即座に解説し、事件を未然に防いだと述べていたが、Andrewesはこのことにも言及することを忘れない。Andrewesは、「詩編」64章を根拠に事件の暴露を論ずる。「詩編」64章は「敵のおそれ」からの守護に対するダビデの神への祈りである。悪を行う者は「舌をつるぎのようにとぎ」「苦い言葉を矢のように放ち」、共謀して罟を仕掛け、誰も彼らを見破ることができないと豪語する。悪を行う者は、巧妙に悪を謀り、「だれがわれらを見破ることができるか」と言う。しかしながら、悪事が謀られているさなかにも神は彼らに矢を放ち、彼らの「舌のゆえに」彼らは滅ぼされる。悪事を行う者がいかに巧妙であろうとも、神は彼らを見逃しはしない。それゆえ、人は皆神の働きを認め、神の「みわざ」に目覚めるのである。「詩編」64章は以上のような神のダビデのおそれからの守護をうたっているが、Andrewesはこれを火薬陰謀事件に適応しようとする。「敵のおそれ」は、カトリック教徒の火薬陰謀事件であり、彼らは密かに陰謀を謀り、実行直前まで計画が進んだ。しかし、計画は主犯者の一人Francis Treshamのメモからその全貌

が知られ、陰謀事件は未遂に終わった。ジェームズ一世に寄せられた Salisbury 伯からの Francis Tresham のメモは詩編の「つまずきのもととしての舌」である。しかし、Tresham のメモに関してはその内容があいまいであり、当初その真意は謎だった。それを解読したのはジェームズ一世であった。なぜジェームズ一世はメモの解読ができたのか。それは「王の唇には魔力」があったからである。この魔力とは神の靈感であり、この靈感により王は事の真相を見逃すことはなかった。王の魔力が王を「秘密を暴く者」とせしめる。

... this which was written was so written, as divers of profound wisdom knew not what to make of it. But then comes God again, God most certainly, and as in the Proverbs, the sixteenth chapter, and tenth verse, puts... a very "divination," a very oracle in "the King's lips," and his mouth missed not the matter; made him, as Joseph, "the revealer of secrets," to read the riddle, giving him wisdom to make both explication what they would do, and application where it was they would do it.⁽²³⁾

まさに王の背後には神があり、神からの靈感を受けて王は秘密を暴く。王自身が王の力によって行うのではない。あくまでも人間の考えることは神によって完全なものとなされるのである。だから Andrewes は「これは確かに神であった。もし彼が聖なる王の霊によって満たされなければ、これは誰も行うことはできないとファラオが言うだろう、それは神によって行われた。」⁽²⁴⁾ と言うのである。ジェームズ一世が Francis Tresham のメモを的確に解読し、事件の全貌を理解しえたのは神の靈感のせいである。つまりジェームズ一世は神の霊に満たされていたのである。実際ジェームズ一世がメモの解読に成功したのは何によるのかは定かでない。しかし、Andrewes はそれをジェームズ一世に宿る神の霊であるとした。ジェームズ一世は自ら王権神授説に固執したが、それを後押しするような Andrewes の言葉がいかにジェームズ一世を喜ばせたかを推測することは難しくない。ジェームズ一世を喜ばせようとする Andrewes の気配りがここで読みとられる。さらに、Andrewes はサウルの迫害の下にあったダビデの祈りと言われている「詩編」108章を持ち出す。後半の自分の苦難を訴え、神からの救助を求める祈りに依拠しつつ、Andrewes はサウルの迫害下のダビデと火薬陰謀事件下のジェームズ一世を重ね合わせる。ダビデは自らを罪に陥れようと

奸計を謀る者からの救助を訴えているが、そのような奸計者にはその奸計の罰が逆に奸計者自らの身に降りかかってくる。それが「御手によること」「御計らい」であることを人は知る。

“And hereby shall they know, that it is Thy hand, and that Thou Lord hast done it.” How? in that they are thus “clothed with their own shame,” and even “covered with their own confusion;” that they fall as fast as they rise, are still confounded, and still Thy servants rejoice.⁽²⁵⁾

悪を行う者は「恥を上着としてまとい」、自らの悪によって罰を受ける。ジェームズ一世は国会演説で「詩編」57章6節を引用して、「彼らはみずからその(穴)中に陥った」と火薬陰謀事件首謀者を評したが⁽²⁶⁾、Andrewesの上記の言葉はこのジェームズ一世の言葉をふまえてのものである。いかに人は悪を巧みに謀ろうとその悪は必ずや失敗する。それもすべて神の「御手」によると Andrewesは言う。カトリック教徒による火薬陰謀事件は最初から失敗するように運命づけられていたのである。彼らは彼らが作った落とし穴に落ち、処罰されることになった。すべてこれは神の摂理であると Andrewesは言いたいのである。もし悪が成功し、国会が爆破されたら、神の正義はどうなるか。悪が栄え、正義が減びることはありえないことは聖書から立証できると Andrewesは「詩編」を引用し、しきりに悪への神の懲罰を力説する。いずれにせよ神の御手により、火薬陰謀事件は未然に防がれたが、神の御手が具現化されたのがジェームズ一世の事件暴露である。現世における神の代理人たるジェームズ一世が神の靈感を受けて事件を暴露したのは何ら驚くに値しない。むしろ地上における神としてジェームズ一世はカトリック教徒の爆破事件を予知していたかのごとく、いとも簡単に事件を暴露した。そのようなジェームズ一世を Andrewesは神格化し、ジェームズ一世に賞賛に言葉を浴びせる。Andrewesは火薬陰謀事件に適応できると言って、「詩編」126章1節を引用する。それはバビロン捕囚から「都」(祖国)に帰り、シオンの繁栄を主に祈る章である。

“When God,” saith he, “turned away the captivity, (say we, the destruction) of His people, then were we like to them that dream.”⁽²⁷⁾

バビロン捕囚からの祖国への帰還は国会議事堂爆破事件からの脱出となり、祖国へ帰還するユダヤ人はジェームズ一世達となる。このように Andrewes は「詩編」の各章から火薬陰謀事件に適応できる箇所を見つけ、それを事件に巧みに適応し、陰謀事件の不当性を批判する。火薬陰謀事件は聖書に照らし合わせても少しも正当化されない。むしろ聖書では火薬陰謀事件のような「主から油注がれた人」への反逆は神からの懲罰を受ける運命にある。「神の書」から反乱者へは罰が必ず下ることになり、悪は必ずや滅びる。Andrewes がジェームズ一世を擁護する際に引き合いに出すのは詩編だけではないが、最も依拠するのは「詩編」である。その理由の一つは詩編にはユダヤ人の様々な艱難・労苦からの脱出が記されており、そういったユダヤ人の受難克服が火薬陰謀事件に遭遇したジェームズ一世と重ね合わせて考えることができるのである。聖書が依然として権威を保持していた時代にあって、人々を説得せしめる最大の武器は聖書であった。

(3) “Thankgiuing to God for his great Mercy”

ジェームズ一世が火薬陰謀事件が未遂に終わったことに対して神への慈悲に感謝の念を表していたことについてはすでに触れたが、Andrewes はそれを踏まえて説教として取り上げた「詩編」118章24節の“let us rejoice and be glad in it”（われらはこの日に喜び楽しむであろう）について更に言葉を続ける。ジェームズ一世は神への感謝について以下のように演説していた。

How much more cause haue we that are Christians to bestow this time in this place for Thankgiuing to God for his great Mercy, though we had had no other errant of assembling here at this time? wherein if I haue spoken more like a Diuine then would seeme to belong to this place, the matter it selfe must plead for mine excuse: For being here common to thanke God for a diuine worke of his Mercy, how can I speake of this deliuerance of vs from so hellish a practise, so well as in language of Diuinitie, which is the direct opposite to so damnable an intention? And therefore may I iustly end this purpose, as I did begin it with this Sentence, *The Mercie of God is aboue all his workes.*⁽²⁸⁾

“so hellish a practise”, “so damnable an intention” からの救出を神の慈悲に帰したジェームズ一世は神の慈悲を幾度となく国会演説で強調していた。Andrewes は火薬陰謀事件が歴史上類を見ない凶悪な犯罪であることを力説し、「申命記」「エレミア書」「詩編」「福音書」から事件が未曾有のものであり、「同じようなことはイスラエルには決して見られなかった」(マタイ伝：9章33節)という。⁽²⁹⁾ それゆえにジェームズ一世が火薬陰謀事件から無事脱出できたことは「驚くべき」ことで、「主は地のうえに新しいことを創造された」(エレミア書：31章22節)のである。⁽³⁰⁾ 1605年11月5日は悪魔が作った日であり、同時に、神が作った日でもある。だから「喜び楽しむ」のである。Andrewes は、聖書のなかに火薬陰謀事件のような事件からの救出に対しての神への感謝と祝宴を見だし、聖書と同じように火薬陰謀事件からの無事の脱出を祝わなければならないと言う。Andrewes は、「ネヘミア」書8章9-10節を引用するがこれは必ずしも火薬陰謀事件とは重ならない。ネヘミアはエルサレムの城壁を再建した人物であるが、主に対しての祝いに言及している箇所はネヘミアが律法の書、つまりモーゼの五書を人々の前で朗読する場面である。律法の言葉を聞いた民衆が泣いたと記されているが、それに対してネヘミアは「今日はわれわれの主の捧げられた聖なる日だ。悲しんではならない。主を喜び祝うことこそ、あなたたちの力の源である。」という。Andrewes は次のように言う。

And Nehemiah's promise to encourage us, that if the strength of the Lord be our joy, the very “joy of the Lord” shall be our “strength.”⁽³¹⁾

つまり主を祝うことによって人々は生きる力の糧を得るのである。「ネヘミア書」は火薬陰謀事件と符合しないが、「申命記」16章11節の引用は火薬陰謀事件と同様の性質を有する。「申命記」16章11節は過越祭の祝いについての記述であり、エジプトにおけるユダヤ人が体験した虐殺からの脱出に対する神への祝いがこの章では記されているからである。これは火薬陰謀事件と合い重なる事件である。「エジプトで奴隷であったことを覚え、これらの定めを守り行わなければならない。」と記されているが、Andrewes は火薬陰謀事件を風化させることなく、永久に11月5日を思い起こし、祝祭日とし、喜び、祝わねばならないことを説くのである。Andrewes は「詩編」の“rejoice”と“glad”を区別し、一方を

肉体的な喜び、他方を精神的な喜びと区別し、前者だけでは不十分で、神は決して満足してくれない。“The joy of the soul is the soul of joy.”⁽³²⁾である。しかし、この“glad”は長続きはしない。だから毎年継続して神へ祝福を捧げねばならない。そうすることによって人々は「力の源」を永続的に保証される。神が11月5日にジェームズ一世にもたらしたよき御業をいつも生じさせ、いつも同じ祝福を継続するように11月5日を祝祭日とするのである。

It is our wisdom therefore to make the means for the continuance of it [our Hosanna], that God would still establish the good work He this day wrought in us, still bless us with the continuance of the same blessings.⁽³³⁾

このように火薬陰謀記念日を設け、神の慈悲に対して感謝を表明し、喜び、祝うことは事件への記憶を永久に心に留めることになる。そしてこれが人々の繁栄に至るのである。我々の未来の救済と現在の繁栄について Andrewes は次のように言う。

Lastly, because both these, the one and the other, our future salvation by the continuance of His religion and truth among us, and our present prosperity, like two walls, meet upon “the Head-stone of the corner;” depend both, first, upon “the Name of the Lord,” and next upon him that in His Name, and with His Name, is come unto us, that is, “the King,” ...so that neither of them sure, unless he be safe;⁽³⁴⁾

ここで Andrewes はジェームズ一世を主の代理人としている。未来の救済と繁栄は主の名前と主の名前となって主の名前と共に我々に来た人、即ち「王」による、と Andrewes は言うが「主の名前と主の名前となって主の名前と共に我々に来た人」、即ち「王」がジェームズ一世を示していることは明白である。つまり人々の未来の救済と繁栄は神とジェームズ一世にかかっているのである。Andrewes は説教の最後でジェームズ一世に最大の賛辞を捧げている。ジェームズ一世は言うなれば主にも等しい人物である。主たるジェームズ一世に英国民の救済と繁栄が依存しているのである。ジェームズ一世が主に近い存在であれば、今説教が行われている Whitehall は「主の家」(the House of the Lord) であ

る。そして「主の家」にとどまる人々である聴衆は、主の善が継続して行われることとジェームズ一世への祝福を祈るのである。

This then we all wish that are now in the “House of the Lord,” and we that are of “the House of the Lord,” do now and ever, in the temple and out of it, morning and evening, night and day, wish and pray both, that He would continue forth His goodness, and bless with length of days, with strength of health, with increase of all honour and happiness, with terror in the eyes of his enemies, with grace in the eyes of his subjects, with whatsoever David or Solomon, or any King that ever was happy, was blessed with, him that in the Name of the Lord is come to us, and hath now these four years stayed with us, that he may be blessed, in that Name wherein he is come, and by the Lord in Whose Name he is come, many and many years yet to come.⁽³⁵⁾

ここで Andrewes は、火薬陰謀事件であやうく命を落とすところだったジェームズ一世に神の祝福が末永く続くことを祈っている。「我々のところにこの4年間いた彼」が1603年に英国王に即位したジェームズ一世であることは明らかである。火薬陰謀記念説教としてジェームズ一世の国会演説の内容を吟味し、それに基づいて王の前で説教を行った Andrewes は最後まで御用説教家としてのその役目を十分に果たすことになる。自ら神に匹敵する人物と賞賛されたジェームズ一世自身がこの説教を聞いていかなる印象を受けたかは推量の域に留まるが、ジェームズ一世の胸中を察することはそれほど困難ではない。Andrewes は、宮廷説教家として以後益々その地位を確固たるものし、ジェームズ一世王朝を擁護する説教を次々に行うことになる。

3. The Gowrie Conspiracy 説教におけるジェームズ一世

1607年8月5日、Andrewes は前年11月5日の火薬陰謀記念説教から8ヶ月後ガウリー伯兄弟幽閉事件記念説教を Rumsey で王臨席の下行う。⁽³⁶⁾ この説教は Andrewes のジェームズ六世幽閉事件記念説教の最初の説教であるが、火薬陰謀記念説教と同じくジェームズ一世の生命危機からの救出という主題を扱っている点で興味深い説教である。どのようにして Andrewes はジェームズ一世を擁護

しているのか。その説教方法は火薬陰謀記念説教で Andrewes が使用した方法と同じく、聖書の一部を巻頭に掲げ、その解釈と聖書の事件への「適応」である。Andrewes が説教に選んだのは以下の「サムエル記下」18章32節である。

And Cushy answered, The enemies of my lord the King, and all that rise against thee to do thee hurt, be as that young man is.

(クシ人は答えた、「王、わが君の敵、およびすべてあなたに敵して立ち、害をしようとする者は、あの若者のようになりますように」。)

Andrewes が、「サムエル記下」からダビデ王に謀反を起こした「若者」を説教の主題に選んだ理由はもちろん王への謀反という重大なテーマの他に王への謀反には必ず罰が下ることを述べるためであった。しかしこの一節は見方によってはかなり問題のある一節であるとも言える。なぜなら「あの若者」とはダビデに反旗を翻した自分の三男のアブサロムであるからである。なぜアブサロムが父親に反旗を翻した理由は、アブサロムが王位継承権を奪われたためであったが、そのアブサロムはダビデの意向を無視した軍の長であるヨアブに殺害されるのである。Andrewes がガウリー伯兄弟陰謀事件説教の最初の説教にダビデに反逆を試みた息子のアブサロムを取り上げたことは大胆と言えれば大胆である。説教にはなみなみならぬ興味を抱いていたジェームズ一世の機嫌を損ねたとか王の不興を買ったとかの言葉は聞かれないが、Andrewes としては王への反逆とその是非を論じておきたいがためにあえてアブサロムを取り上げたのであろう。銜学的なジェームズ一世は常々15の外国語に精通していた Andrewes の神学者としての学識には一目をおいていたが、彼がアブサロムのダビデ王への反逆を説教の主題に選んだことには驚きを禁じ得ない。Andrewes の意図はたとえ王の息子であろうとも反逆には変わりなく、それ相応の罰を受けるのが当然であるという点にあったのであろうが、それにしてもジェームズ一世の息子達を考えると適切な選択であったとは考えられない。ともあれガウリー伯兄弟弾劾説教は「サムエル記」からの一節を起点として展開するが、火薬陰謀事件説教と同じく、王への謀反攻撃と王の神聖を論ずることが Andrewes に課せられた任務となる。上記「サムエル記下」18章32節の一節の Andrewes の解釈は以下の通りである。

That young man was Absalom; and he was now hanging upon an oak tree, with three darts through him. Like him doth Cushi wish all may be that do as he did, that is, be the King's enemies, and rise up against him. For I find in the text a dangerous treason plotted against King David--plotted, but defeated; and Absalom the author of it, brought to a wretched end. Good news thereof brought by Cushi that saw it. And that good news here concluded with this wish, That all the King's enemies may speed no better, no otherwise than he sped.⁽³⁷⁾

「あの若者」とは、3本の投げやりで心臓を突き通されてかしの木にかかっているアブサロムで、アブサロムのように行う者はすべてアブサロムのようになることをクシ人は願っている、と Andrewes は字句通りに「サムエル記下」18章32節を読む。そして Andrewes の解釈は、アブサロムの反逆はダビデ王に対して企てられたが失敗に終わった危険な反逆であり、その首謀者のアブサロムは惨めな最後をとげた、というものである。Andrewes の結論は、王の敵は王以上に繁栄することがないようにというクシ人の願いと同一である。Andrewes はこの「サムエル記下」8章32節をガウリー伯兄弟陰謀事件に「適応」しようとする。ガウリー伯兄弟から無事救助された幽閉事件において「二人の謀反人への神の正しい行いの同様の例」を Andrewes は見るのである。

A barbarous and bloody treason they [Gowrie brothers] imagined against our sovereign [James VI]. God brought their mischief upon their own heads,... And we are here now to renew with joy, the memory of these good tidings; and withal, to pray Cushi's prayer, and all to say Amen to it, that the like end may ever come to the like attempts.⁽³⁸⁾

「サムエル記下」で記されたクシ人の「よきおとづれ」の思い出を喜びを持って新たに、「アブサロムと同じ最後が同じ企てに来るように」というクシ人の祈りを祈るために Andrewes はジェームズ一世の面前で説教を行っているのである。「サムエル記下」のアブサロムのダビデへの反逆をガウリー伯兄弟事件に適応すれば、ガウリー伯兄弟がアブサロムで、ダビデがジェームズ一世となる。そして、アブサロムのダビデへの謀反が悲惨な結果をもたらし、ダビデが救わ

れたように、ガウリー伯兄弟のジェームズ一世への陰謀も兄弟が殺害され、ジェームズ一世は難を逃れるという結果に終わった。聖書を引き合いに出しながら、ガウリー伯兄弟のジェームズ一世への反逆と類似した事件を聖書の中から探し出し、それによってジェームズ一世を擁護する。なぜ Andrewes は「サムエル記下」の一節を17世紀のイギリスに「適応」するのか言えば、それは聖書で生じたことは聖書の時代だけに限られるのではなく、時代を超えていつの時代にもあてはまるからである。聖書のある時代への適応は「タイポロジー」という聖書解釈の変形ではないかと私は考えているが、17世紀に特に広まった聖書のある時代の事件、人物への適応には確かに「歴史の反復」という意識が強く感じられる。タイポロジーでは、旧約聖書で起こったことは新訳聖書で繰り返されると考え、旧約聖書の「タイプ（予型）」が「アンチタイプ（対型）」として新訳聖書に現れる。Andrewes は、「サムエル記下」をガウリー伯兄弟陰謀事件に適応するわけであるが、詳細に見るとサムエル記の一節にはジェームズ一世に適応するには幾分強引な適応ではないかとの印象も受ける。Andrewes が主張したかったのは王への反逆には必ずや神の罰が下るということで、その意味ではサムエル記の一節のジェームズ一世への適応には妥当性があると言ってもよいだろう。

Andrewes は、クシ人の祈りと予言のガウリー伯兄弟陰謀事件への適応を説教で展開する。クシ人の祈りと予言はダビデの時代だけに限られるのではなく、またダビデと共に終わったのではない。それは Andrewes の時代、そして未来に、この世の終わりまで及ぶものであ、以前としてその「力」を失うことはない。

Last of all, that this prayer or prophecy [of Cushi] is not pent or shut up in David's days, not to end with him. It reaches unto these of ours; hath his force and vigour still; hath and shall have, unto the world's end. God heard him praying, and inspired him prophesying. As it came to pass in Absalom, so did it in those that rose after him, that rose against David, that rose against many others since David, and namely, against ours. So it hath been hitherto; and so ever may it be! Cushi, not only a Priest to pray that so they be, but a Prophet to foretell that so they shall be.⁽³⁹⁾

アブサロムに起こったことはダビデ以来多くの謀反を起こした人にも起こっ

たことで、ジェームズ一世に謀反を起こした者にも起こったことである。クシ人は、王への謀反者がアブサロムのようにあれと祈る司祭であり、謀反者がアブサロムのごとくあるだろうと予言する予言者でもある。王への謀反に罰が下るのは変わることのない永遠の真理であり、時と場所を選ぶことはない、と Andrewes は言いたいのである。その例証として Andrewes は謀反の例を他の旧約聖書や新約聖書に探し出し、それがすべて失敗に終わり、相応の罰を受けていることを指摘する。そもそも「創世記」のエデンの園におけるへびも主の命令にそむき、アダムとイブを誘惑し、それがためにへびは、「腹で、這いあるき、一生、ちりを食べる」罰を主から受け、アダムとイブも樂園を追放されるという罰を受けた。「創世記」の人類の始まりの頃から主への背きには主からの罰があった。Andrewes は、主への反逆の例を旧約聖書や新約聖書に見い出し、それがいつの時代にも起こったことだと主張する。聖人、天使、神が行ったことは再び行われるし、行われるべきであるし、行われなければならない。Andrewes は、強固に旧約聖書でのアブサロムのダビデへの反逆のジェームズ一世への適応の正当性を強調する。

Andrewes は、説教の前半でアブサロムのダビデへの謀反のガウリー伯兄弟陰謀事件への適応を試みるが、その後ジェームズ一世の最大の関心事である王権の神格化に論を移す。ジェームズ一世の面前で説教を行う説教家は何らかの形で王を喜ばせなければならず、王の不興を買った場合は宮廷での説教を依頼されないという不名誉が待ちかまえていた。Andrewes は、いかにしてジェームズ一世を喜ばせるかを熟知しており、王権の神聖もジェームズ一世にとっては説教家から論じてもらわなければならない重要なテーマであったのである。王権の神聖を論じることは、ジェームズ一世及び王朝への揺るぎない擁護の表明でもあった。王権の神聖を論証できれば王への反逆がおのずから論駁できる。ダビデは王であった。その王は主から「油注がれた」神聖を付与されている。そのダビデに謀反を試みたアブサロムはいわば主に対して謀反を起こすのにも等しい冒とくである。Andrewes は、「背いて立ち上がった」最初の例をアベルとカインに見る。次にモーゼに反抗して立ち上がったコラがいる。反逆して立ち上がる者は皆敵である。それゆえ、アブサロムはダビデに対して謀反を起こして立ち上がったので、彼も敵である。ダビデに反抗して立ち上がった者は多くいたし、神にも敵がいた。平和主義者のジェームズ一世には敵はいなかった、

と Andrewes はジェームズ一世を褒め称える。だが、ジェームズ一世には二度謀反者が立ち上がった。「8月と11月のすべてのジェームズ一世の危険は、カインのように王に反逆して立ち上がる者からの反逆である。」と王への謀反者を非難する。ジェームズ一世には謀反を起こされるいわれはない。そもそも王とは反乱があってはならない人物である。

A King by nature is *Rex Alkum*, saith Solomon, one against whom there is no rising; so God would have it. Subjects, saith the Apostle, to lie down before them: rising up against is clean contrary to that, and so contrary to God's will; He would have no rising.⁽⁴⁰⁾

「謀反して立ち上がる」ことは神の意志に反する行為である。Andrewes のガウリー伯兄弟による幽閉未遂事件記念説教のテーマは、旧約聖書を17世紀イギリスへの適応からの事件弾劾であるが、それ以上に Andrewes が本説教で最も強調したかったのは王権の神聖であった、と言ってもよい。⁽⁴¹⁾ 王権の神聖はまさしくジェームズ一世王観と一致する主題で、その神格化が徐々に攻撃されかけていた時期にあって、王自らの前で王権の神格化を説く Andrewes は王をいたく満足させることになる。アブサロムの父ダビデへの謀反をガウリー伯兄弟のジェームズ一世への幽閉事件に適応するにあたっては、ややジェームズ一世の不興を買いかねなかったが、王権の神聖を論ずる Andrewes にはジェームズ一世お気に入りの説教家としての面目躍如たるところが見られる。上記の引用では、旧約・新約聖書の両方から王権の絶対性を擁護し、王とは反乱があってはならない存在であることを強く指摘する。Andrewes の論点は明白である。神聖な王への反乱は神への反乱を意味するのである。

But they that rise against the King, are God's enemies; for God and the King are so in a league, such a knot, so straight between them, as one cannot be enemy to the one, but he must be to other. This is the knot. They are by God, of or from God, for or instead of God.⁽⁴²⁾

神と王とは「同盟」関係にあり、両者は「結び目」によって固く結ばれてい

る。王は神によって神から神のために神の代わりに存在する。徹底した神と王との不可分な関係を説く Andrewes はジェームズ一世の王権神授説を意識した発言を行う。Andrewes は、神と王との関係を更に続けて述べる。

Moses' rod, God's; Gideon's sword, God's; David's throne, God's. In His place they sit, His Person they represent, they are taken into the fellowship of the same name,...They are Gods; and what would we more? Then must their enemies be God's enemies. Let their enemies know then they have to deal with God, nor with them; it is His cause, rather than theirs; they, but His agents.⁽⁴³⁾

モーゼ、ギデオン、ダビデは皆神の代わりに座し、神を表している。だから彼らへの反逆者は神を扱うことになる。彼らの大義も神の大義であり、彼らは神の代理人にすぎない。王は神の代理人にすぎない、という Andrewes の言葉はジェームズ一世の言葉を思い出させる言葉であるが、王と神は切っても切り離し得ない関係にあり、誰にも犯すことのできない神聖さが付与されている。だから聖パウロは、「王に抵抗する者は神に抵抗する」と言っているのである。

王への反逆者は神を敵にしているのみならず、人類をも敵にしている。王は単に神に由来するだけでなく、我々のために、人類のために現世に神から送られているのである。王国の健全と安泰は王の健全と安泰と深く結びついている。しかるに、王が反逆者により生命の危機に陥れば、当然のことながら王国も存亡の危機に直面することとなる。王と国家の「対応」理論から更に Andrewes の論は展開する。

"The head of the tribes," is David called; "the light of Israel;" ... "the shepherd of the flock;" "the corner-stone" of the building. I will content me with these. If the "head" be deadly hurt, I would fain know what shall become of the body? If "the light" be put out, is aught but darkness to be looked for in Israel? "Smite the shepherd," must not the flock be in peril? If "the corner-stone" be shaken, will not both the walls feel a wrack?⁽⁴⁴⁾

部族の長、イスラエルの光、羊飼い、建物の礎、が害を被ったら何がその後

に起こるかは明白である。部族間に亀裂が生じ、イスラエルは暗黒に見舞われ、羊の群れは危機に陥り、建物は崩壊する。王はまさに「部族の長、イスラエルの光、羊飼い、建物の礎」であり、王への危害がいかなる危機を国家にもたらすかは容易に理解できる。国民の幸福と不幸はすべて王の繁栄と衰退によっているから、王に対して立ち向かう者は断じて避けなければならない。

王への反逆者は更に教会への敵でもある。ダビデの宮殿と神殿はともに同じ丘にあったことから明らかなように、王と教会は密接な関係にある。王はいわば教会の「養育者」である。

Now they that are enemies to David, are enemies to Sion; so near neighbourhood between David and Sion, the King and the Church, as there is between his palace and the temple; both stand upon two tops of one and the same hill. The King is *nutritius Ecclesiae*:⁽⁴⁵⁾

良い乳母をもつ子供がその乳母を奪われることは子供を餓死ややせ衰えにさらす危険へ追いやるのと同様、王が危害を加えられたら教会がどのようなことになるかは明らかである、と Andrewes は言う。神と王の関係同様、王と教会の関係も切り離すことができないほどの密接な関係にある。だから Andrewes は、教会の繁栄は王の善良及び幸福な意向によって決まる、とさえ言い切るのである。Andrewes は、ジェームズ一世と教会の関係はこれまでと比較できないほど良好関係にあり、ジェームズ一世と教会の関係はうまく言っていると見ている。

...tell me whether the King [James I] and the Church have not reference, as I said; and whether the Church have any greater enemies than such as alien the minds of Kings, and make them heavy friends to her welfare and well-being.⁽⁴⁶⁾

教会の繁栄と幸福にとってジェームズ一世は困難な友とはなっていない。王と教会は国家の両輪であり、両者の健全な関係なしには国家の繁栄はありえないことを Andrewes は強調するのである。

このように Andrewes は、王への謀反者は神、人類、教会の敵であることを訴えるが、父ダビデに反旗を翻したアブサロムはこれら三つに罪を犯したのと同

様で、アブサロムが一本ではなく三本の矢を射られたのはまさしく神、人類、教会への罪のためである。

「サムエル記下」のクシ人がダビデにアブサロムの死を伝える記述には王への反乱がいかなる意味を有し、反乱者がいかなる運命を受けねばならないかを祈りと予言の形で述べているが、Andrewes が言いたいのはクシ人の祈りと予言はダビデとアブサロムについてのみ言っているのではないということである。これは時代に関係なくあてはまる祈りと予言で、「あの若者のようになりますように」はいかなる反逆者について言えることなのである。アブサロムの後のシバ、アドニア、ヨアブ、彼らは皆悲運な最後をとげている。ダビデへの予言はダビデだけへの予言ではない。モーゼに反抗を試みたコーラ、サウルの息子を殺害したバーナとレカブ、王の殺害を狙ったビッグタンとテレシ、彼らのある者は首をくぐられ、ある者は生きたまま心臓をえぐり取られ、内臓を抜き取られ、頭を切り落とされ、四つ裂きにされた。すべてが反逆の報いとして悲惨な最期にあっていく。アブサロムのような謀反者は、ヨアブによって三本の矢を心臓に突き刺されたアブサロムと同じ「不思議な、異常な天罰」を受け、最後は血で終わる運命にある。

Andrewes は、「サムエル記下」18章32節を説教の冒頭に掲げ、最初その説明、解釈を述べ、最終的にはジェームズ一世へのガウリー伯兄弟の幽閉未遂事件に適應する。これまで、アブサロムの死をダビデに報告するクシ人の王に適して立ち上がる者は皆「あの若者のようになりますように」をめぐって、新訳・旧訳聖書から様々な例を引き合いにして、王への反逆者への罰について Andrewes は論じてきた。説教の最後で Andrewes は「サムエル記下」のガウリー事件への適應を試みる。Andrewes は、アブサロムとダビデの関係がいかに “the business in hand” (ガウリー伯兄弟陰謀事件)⁽⁴⁷⁾ に合致するか、そしてクシ人の祈りと予言の「力」がジェームズ一世の時代にまで達しているかを見てみたいという。すでに見たように、王に向かって立ち上がる者への神の報いは何ら新しいことではない。神の耳は神の謀反者への罰を祈る祈りを絶えず聞いており、神の腕は祈る人に伸ばされている。クシ人の予言は正しく、それはジェームズ一世へのガウリー伯兄弟についてもあてはまることである。神は7年前の1600年に「クシ人の祈り」を聞き入れ、ジェームズ六世はガウリー兄弟から難を逃れたのである。

This very day yieldeth us one of fresh memory, but seven years since, wherein in our Sovereign [King James VI] God hath given a memorable example of the hearing Cushi's prayer, and the accomplishing his prediction, not in one but in a couple of Absaloms.⁽⁴⁸⁾

アブサロムとガウリー伯兄弟の類似点として Andrewes は以下の 7 点を挙げる。

- (1) 王に反乱を企て結果として殺害された。
- (2) 年令。両者とも若かったのに根深い悪意と危害を企んだ。
- (3) 凶暴性。
- (4) 計画の秘密性。
- (5) 宗教上の偽善。
- (6) 両者とも敬虔なミサに出席した。
- (7) 事件が明らかになったとき正体を暴露した。⁽⁴⁹⁾

アブサロムとガウリー伯兄弟との間の類似点は以上の通りであるが、とりわけクシ人の祈りと予言がダビデ王のみならずジェームズ一世の敵においても生じ、祈りが神に聞き入れられ、予言が実現された。その結果としてジェームズ一世の生命は救われたという点においては両者は類似している。ではダビデ王とジェームズ一世を比較すればどうなるか。両者において反逆という点においてはほとんど変わりはないが、火薬陰謀記念説教においてジェームズ一世がダビデ王よりも遙かに大きい危機にあったと同様、ガウリー伯兄弟陰謀事件においても両者の危険はジェームズ一世のほうがはるかに大きい。Andrewes は以下のようにダビデとジェームズ一世を比較する。

- (1) ダビデは追跡されただけであるが、ジェームズ一世は捕らえられた。
- (2) ダビデには攻撃の手は届かなかったが、攻撃はジェームズ一世の胸まで迫った。
- (3) ダビデの周囲にはいつも臣下がいたが、ジェームズ一世の場合は王を助ける人はいなかった。
- (4) ダビデの救出は神の摂理に帰せられ、ジェームズ一世の場合も神の摂理の表れであるが、ダビデよりも神のより親密な敬意と神の不思議な摂

理の働きがジェームズ一世の場合には見られる。

- (5) ダビデはクシ人により救出を聞いたただけだが、ジェームズ一世はガウリー伯兄弟からの救出を自らの眼で見た。⁽⁵⁰⁾

Andrewes は、ジェームズ一世の幽閉未遂事件がいかに王の生命を脅かしたか、いかにダビデより残忍な事件であったかを強調する。Andrewes としては「サムエル記下」18章32節をガウリー伯兄弟陰謀事件へ適応するだけで済ませたかったが、それだけにとどまらずジェームズ一世の生命危機をダビデと比較し、ジェームズ一世がはるかに大きな危機に遭遇したかを説く。説教の最後で Andrewes は王への謀反者の死と王の救出の喜びを祈るが、それがまたクシ人のアブサロムへの祈りと同一のものとなっている。

Andrewes のガウリー伯兄弟非難の説教は「サムエル記下」18章32節の解釈から始まり、ダビデとアブサロムの関係をジェームズ一世とガウリー伯兄弟へ適応し、「サムエル記下」18章32章に生じたことがジェームズ一世の時代にも生じることを祈り、予言することで終わっている。Andrewes の説教の意図は火薬陰謀事件説教同様明白である。それはガウリー伯兄弟を非難し、ジェームズ一世を擁護することある。それは、また、宮廷説教家としての Andrewes の最大の務めであり、ジェームズ一世にとっても言わずもながであった。説教家とジェームズ一世の間には暗黙の了解があった。それは裏を返せばジェームズ一世の気に入る説教をすることであった。本論では、ジェームズ一世の国会演説における火薬陰謀事件非難から論を進め、ジェームズ一世が要望した火薬陰謀記念説教の一つとして Andrewes の説教を取り上げた。それを見ても Andrewes はいかにジェームズ一世を意識して説教を行っていたかがわかる。Andrewes は、ジェームズ一世が国会演説で言及した要点－火薬陰謀事件からの神の慈悲による脱出、事件の残虐性、記念説教の実施の必要性等－を的確に把握し、ジェームズ一世の国会演説を後押しするような説教を行い、更にはジェームズ一世を神格化までする。Andrewes は、1606年に火薬陰謀記念説教、翌年1607年にガウリー伯兄弟陰謀事件記念説教を行い、2年にわたる説教でジェームズ一世の強力な擁護者となる。1607年には火薬陰謀事件後国内のカトリック教徒を取り締まるためにジェームズ一世は「忠誠の誓い」を彼らに課し、王への忠誠を誓わ

せた。この誓いは結局は教皇の王廢位権を拒否することになり、単なる「一市民」としての誓いであるというジェームズ一世の主張は国内外から猛反発を受け、ジェームズ一世への誓いを拒否するカトリック教徒が現れた。このようなジェームズ一世側とローマ側との論争がガウリー伯兄弟弾劾説教の前まで続いていたことを考慮に入れると、この説教は単にガウリー伯兄弟の行為を非難しているのではなく、前年の火薬陰謀事件説教同様ローマ・カトリック教との論争も Andrewes の頭にはあったと考えるのは当然である。特にジェームズ一世の神格化には神とジェームズ一世との直接的な関係が強調され、現世における神の代理人としてのジェームズ一世の王観が如実に反映され、ジェームズ一世に執拗に抵抗するカトリック教会側に対する強力な武器となる。王への反乱を否定するには王の神聖を論ずることが何よりも効果的な方法であるが、ガウリー伯兄弟弾劾説教において Andrewes はカトリック教会との確執を考えた場合に避けては通れない王権の神聖さを論ずることにより、カトリック教会側を一蹴し、ジェームズ一世の期待に十分沿うことになる。当時説教家がジェームズ一世の面前で説教を行う場合、王は事前に説教を検閲し、自分に気に入らない場合は説教を拒否したこともあった。中にはジェームズ一世の意向に反した説教を行い、その地位を剥奪された説教家もいた。⁽⁵¹⁾ 1604年から1605年にかけてジェームズ一世によって罷免された聖職者は73人から83人という数字があるくらい、ジェームズ一世は自分の気に入らない聖職者を次々と罷免していた。Andrewes はこれらの事情を十分に知っていた。ジェームズ一世は、晩年1622年8月4日に説教家に対し、「説教家への指令」を發布し、説教家が論ずべき内容を国教会の三十九箇条と説教書 (Homilies) で扱われている問題-救い主としてのキリスト、敬虔な生活の奨励、統治者と年配者への尊敬をもった服従-に限定した。⁽⁵²⁾ 自らの外交・内交政策に立ち入ることをジェームズ一世は極度に嫌い、世論に大きな影響力を及ぼす説教家の言論統制を行ったのである。Andrewes が火薬陰謀記念説教を行ったのは1606年11月5日で、ジェームズ一世が英国王として即位してまだ4年しか経過せず、王自身40歳のときであった。しかし、王は国内の世論統一のためには説教家は欠かせない存在であることを十分に認識し、彼らを最大限に利用することによって国内世論を王の意向のままに操ろうとしていた。このような事情の下で説教家が王の意向を無視して自分の好きなことを述べるのは不可能に近かった。だから Andrewes は、火薬陰謀

事件説教では事前にジェームズ一世の国会演説を調べ、その内容に合致する内容の説教を行ったのである。Andrewesの説教が幾分ジェームズ一世への追従的な色彩の濃い説教となったのも説教家の置かれた立場を考慮すると理解できないこともない。McCulloughは、王にお世辞を言うことは宮廷説教家の「黄金律」であったと言っているが⁽⁶³⁾、Andrewesのジェームズ一世への追従的な態度はガウリー伯兄弟幽閉未遂事件記念説教にもはっきりと現れている。火薬陰謀事件説教同様聖書の一節をガウリー伯兄弟陰謀事件に適応し、ガウリー伯兄弟を弾劾する説教であるが、全体としては事件後7年経過したあとの説教だけに緊迫感に欠ける⁽⁶⁴⁾。火薬陰謀事件説教の場合は事件の1年後の説教だけにまだ事件の余韻が説教には色濃く反映されているが、ガウリー伯兄弟事件記念説教の場合はジェームズ一世をいかにして喜ばせようかとの意図が丸見えで、「サムエル記下」8章32節の適応は火薬陰謀事件説教と比べるとそのインパクトは希薄な印象を与える。ガウリー伯兄弟事件説教はAndrewesの説教のなかで最も興味がないと言われるのもこの故であるかもしれない⁽⁶⁵⁾。いずれにせよ火薬陰謀事件説教とガウリー伯兄弟幽閉事件記念説教は同じ手法で同じ主題を扱っている。17世紀という時代への聖書の適応という当時の論争形態の一端が伺われるという点においては看過できない説教となっており、以後のAndrewesの説教はすべて聖書の事件への適応から成り立っている。また、Andrewes以外の説教家たちの手法もAndrewesと同じ聖書（それもほとんどが旧約聖書）の適応から事件を非難している⁽⁶⁶⁾。Andrewesの1606年と1607年の二つの説教はジェームズ一世は大いに満足させたに違いなく、以後Andrewesは火薬陰謀事件説教とガウリー伯兄弟未遂事件記念説教をほぼ毎年王の臨席の下で行う名誉を与えられ、名実とも宮廷説教家の地位を揺るぎないものにする。追従的なお世辞的な印象が強い説教であるが、ジェームズ一世を取り巻く内外からの攻撃を避けるためには聖書を利用することによって王の神聖を強化し、国家の安定を維持する他に名案はなかったのである。何よりもその絶対性が揺るぎつつあったとは言え、いまだにその影響力が強かった聖書を盾に王を擁護し、イスラエルと同じ苦難の道を行くはいるが、絶えず神からの「慈悲」により、イスラエル人がエジプトでの奴隷生活、エルサレム破壊、バビロン捕囚を克服したように、幾多の困難を克服してきた「神の国」イギリス、神によって選ばれた国イギリス⁽⁶⁷⁾、そしてその「神の国」イギリスを率いるダビデ王再来のジェームズ一世を高らかに

世に告げる Andrewes の説教は眼下の宿敵ローマ教皇をも意識した愛国心に燃えた説教でもあった。

注

- (1) Paul A. Welsby: *Lancelot Andrewes 1555-1626* (London: S. P. C. K., 1964), pp. 141-3.
- (2) ジェームズ一世の「忠誓の誓い弁明」については以下を参照。King James I: *Triplici Nodo, Triplex Cuneus, or an Apology for the Oath of Allegiance in The Political Works of James I* ed. C. H. McIlwain (New York: Russell & Russell, 1965), pp. 71-109. 「王に忠実なカトリック教徒」と「王に反抗的なカトリック教徒」については p. 71 参照。火薬陰謀事件については, Mark Nicholls: *Investigating Gunpowder Plot* (Manchester: Manchester University Press, 1991), Alan Haynes: *The Gunpowder Plot* (London: Grange Books, 1994), Antonia Fraser: *Faith and Treason: The Story of the Gunpowder Plot* (New York: Doubleday, 1996) [加藤弘和訳『信仰とテロリズム-1605年火薬陰謀事件』(慶應義塾大学出版会, 2003年)] 等参照。特に Fraser の著は事件の全貌を余すところなく論じている。
- (3) W. F. Mitchell: *English Pulpit Oratory from Andrewes to Tillotson* (London: Society for Promoting Christian Knowledge, 1932), p. 3.
- (4) 火薬陰謀記念説教を最初に行ったのは William Barlow である。Barlow は、事件発覚4日後の1605年11月10日, Paul's Cross で説教を行った。その説教は, Andrewes の説教同様, ジェームズ一世の国会演説に歩調を合わせ, 「詩編」の一節を事件に適応し, 王を擁護する説教であったが, ジェームズ一世によって命令された説教ではなかった。
- (5) McIlwain, p. 281.
- (6) McIlwain, p. 282.
- (7) McIlwain, p. 282.
- (8) McIlwain, p. 283.
- (9) McIlwain, pp. 283-4.
- (10) McIlwain, p. 284.
- (11) McIlwain, p. 285.
- (12) Andrewes は, ジェームズ一世治世の間 Christmas に11, Ash Wednesday に8, Lent に6, Good Friday に3, Easter に19, Whitsunday に15, Gowrie and Gunpowder Anniversaries に19の説教をそれぞれ行っている。[P. M. McCullough: *Sermons at Court* (Cambridge: Cambridge University Press, 1998), p. 147. Note 180. 参照.]

- (13) Andrewesの説教は以下を使用した。*The Works of Lancelot Andrewes* (New York: AMS Press, 1967), vol. iv. pp. 203-222. 以下 *Works* と省略する。なお旧約聖書の日本語訳については以下を使用した: 『旧約聖書』(東京:日本聖書協会, 1962年)。また, 『聖書 新共同訳』(東京:日本聖書協会, 1992年)をも参照した。その他『旧約聖書略解』(東京:日本基督教団出版局, 1975年), 『旧約・新約聖書大事典』(東京:教文館, 1989)をも参照した。
- (14) *Works*, p. 203.
- (15) *Works*, p. 204.
- (16) *Works*, p. 207.
- (17) *Works*, pp. 208-9.
- (18) *Works*, pp. 210-211.
- (19) *Works*, p. 211.
- (20) *Works*, p. 212.
- (21) *Works*, p. 212.
- (22) *Works*, p. 212.
- (23) *Works*, p. 214.
- (24) *Works*, p. 214.
- (25) *Works*, p. 214.
- (26) McIlwain, p. 284.
- (27) *Works*, p. 215.
- (28) McIlwain, p. 284.
- (29) *Works*, p. 215.
- (30) *Works*, p. 215.
- (31) *Works*, p. 217.
- (32) *Works*, p. 218.
- (33) *Works*, p. 219.
- (34) *Works*, p. 221.
- (35) *Works*, p. 221.
- (36) ガウリー伯兄弟によるジェームズ六世幽閉事件については, Samuel Cowan: *The Gowrie Conspiracy and Its Official Narrative* (London: Sampson, Low, Marston & Company, 1902), Andrew Lang: *James VI and the Gowrie Mystery* (London: Longmans, Green, and Co., 1902)を参照。なお簡略ながら要領を得た事件の概略については, *Works*, pp. 4-6にある。これは Archbishop Spotswood: *History of the Church of England* (1600), Book 6からの抜粋であると注がついている。
- (37) *Works*, p. 3.
- (38) *Works*, pp. 4-7.

- (39) *Works*, p. 7.
- (40) *Works*, p. 11.
- (41) この問題については、M. F. Reidy: *Bishop Lancelot Andrewes* (Chicago: Loyola University Press, 1955), chap. viii や Debra Kuller Shuger: *Habits of Thought in the English Renaissance* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1990), pp. 141-158 をも参照。William Tate は、Andrewes はジェームズ一世の王観を火薬陰謀記念説教で王に忠実に映し出している、と言っている。[William Tate: *Solomonic Iconography in Early Stuart England: Solomon's Wisdom, Solomon's Folly* (New York: The Edwin Mellen Press, 2001), p. 63.]
- (42) *Works*, p. 13.
- (43) *Works*, pp. 13-4.
- (44) *Works*, pp. 15-6.
- (45) *Works*, p. 16.
- (46) *Works*, p. 17.
- (47) *Works*, p. 20.
- (48) *Works*, p. 20.
- (49) *Works*, p. 21.
- (50) *Works*, p. 22.
- (51) McCullough, pp. 141-7 参照。
- (52) 「説教家への指令」(Directions to Preachers)については以下を参照。J. R. Tanner: *Constitutional Documents of the Reign of James I A.D. 1603-1625* (Cambridge: Cambridge University Press, 1952), pp. 80-83. なお、ジョン・ダンは1622年9月15日に「説教者への指令」を擁護する説教を行っている。*The Sermons of John Donne* ed. G. R. Potter and E. M. Simpson (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1959), vol. iv, pp. 178-209 参照。
- (53) McCullough, p. 144.
- (54) Nowak は、Andrewes の1607年の最初の火薬陰謀記念説教は“emotional”であると言っているが、この“emotional spirit”がガウリー伯兄弟陰謀事件説教には欠けているのは否定できない。Thomas Stephen Nowak: “Remember, Remember the Fifth of November”: Anglocentrism and anti-Catholicism in the English Gunpowder sermons, 1605-1651’, Ph.D Dissertation, State University of New York at Stony Brooks, 1992, p. 72.
- (55) Trevor A. Owen: *Lancelot Andrewes* (Boston: Twayne Publishers, 1981), p. 129.
- (56) 1605年から1651年の間に行われた火薬陰謀記念説教36のうち31の説教はすべて旧約聖書の火薬陰謀事件への適応である。(Nowak, pp. 349-350.) Andrewes のガウリー伯兄弟陰謀事件記念説教8つはすべて旧約聖書からの事件弾劾である。

57) これは“the Elect Nation”としてのイギリスに通ずる考えで、Nowakはそれを“Anglocentrism”と呼んでいる。(Nowak, Introduction.) クリストファー・ヒルは次のように言っている。「1640年以前の世紀には、多くの者がイングランドを、神が絶えず介入して保護する選ばれた国家と見ていた。1588年には神が風を送り、スペイン無敵艦隊は散らされた。一世紀の後、プロテスタントの風はオレンジ公ウィリアムを無事にイングランドまで運び、教皇主義者ジェームズ二世にかえて王とした。イングランド共和国の革命国爾でさえ、自由は「神の祝福によって回復した」と主張した。」[クリストファー・ヒル 小野功生訳『十七世紀イギリスの宗教と政治』(東京：法政大学出版局，1991)，p.401.]「神の国」イギリスはどこに由来するのかについて、HallerはJohn Foxeの“The Book of Martyrs”に言及して、次のように言っている。

“Foxe served both Protestant piety and English patriotism by presenting a view of universal history centering in England and the English church. All history, he held, was occupied with the struggle of Christ and Antichrist for the souls of men, particularly of Englishmen. The climax of this struggle began with the Reformation and it destined to end in Christ’s approaching final triumph in England....And English Protestants were taught by Foxe to answer that the true church since apostolic times had always been present in some disguise in England, that in England, though continually beset, it had never been overwhelmed, that in England with Wycliffe the Reformation had begun and spread thence to all the world, and that in England, if Englishmen did their part, it was destined to be consummated and Antichrist brought to his final doom.” [William Haller: *Liberty and Reformation in the Puritan Revolution* (New York: Columbia University Press, 1955), p. 47. この「選民」意識のクライマックスがピューリタン革命であったことは言うまでもない。なおジョン・ダンも神により選ばれたイスラエル人について説教で言及している。(Potter and Simpson, vol.vi, pp.344-5.)